

新入生歓迎・エルサルバドル人民支援 516 1時、A121の敵映画討論集会

すべての新入生のみならず！ 結成間もない京大ラテン・アメリカ研究会から歓迎の挨拶を送ります。

私達は今、中央エルサルバドルに注目しています。この国では、たった14の家族が、雇工の90%を所有する半面、民衆は信じられない位の貧しい暮らしを強いられています。文盲率は42.9%、乳児死亡率は58.3%にもものぼります。加えて、昨年だけでも、12000の命が政府軍や警察、地主の私兵の手で奪われたのです。この国の内戦については、マスコミの報道を通じて、みなさんもご存知のことでしょう。民衆が武器を持って立ち上がったのは、ただ、このような悲惨な現実を終らせるには、こうするしかないと確信したからにはほかありません。

この国は、16世紀のスペイン征服以来、抑圧と従属の関係を維持し、民衆の一切の希望を打ち砕くために、既に3000名の軍事顧問を派遣し、内戦に介入しています。全世界がこの闘いの成行きを見守っており、心ある人々は、アメリカの介入を糾弾し、民衆の勝利を願っています。

所で、日本政府は、この内戦にどんな立場を取っているのでしょうか。新聞の伝える所をそのまま受け取れば、日本はこの事態には元々関係なく、ただ、西側陣営の一員として、アメリカの要請に従って、純粋に経済的な援助を約束したような印象を受けます。しかし事實は、それどころではありません。エルサルバドルで生産された綿花の80%以上をFED(同然)で買い占め、現地の労働力を低賃金で酷使しているのは、他ならぬ日本企業なのです。

このことは、70年代後半、急速に目に見えるものとなり、いわゆる「インシカ事件」の原因となりました。この事件は、日系合弁繊維会社インシカの社長がテリウによって捕えられ、テリウ側の要求を拒否した政府軍とテリウの交戦中に死するに至ったというもので、このとき、テリウ側は、その声明文の中で、日本企業がエルサルバドルで行っている不正を暴露し、厳しく糾弾しました。このことからわかるように、日本はすでに、エルサルバドルの状況に深くかかわっており、自分自身の利害から、民衆の勝利を阻止するために、アメリカと共同歩調を取っているのです。

現代の世界では、地理的な遠さが、政治的、経済的な遠さを意味しないことばかりではありません。また、一国の資本が他国の民衆を収奪する時、そこに生じる葛藤は、階級的であるばかりか、すでに民族的なものでもあるのです。日本企業の経済侵略は、日本の民衆である私達を、エルサルバドル民衆との否定的な関係に引き入れてしまいました。この関係を清算し、新たな関係を打ち立てるのは、両国の民衆の仕事です。この仕事を着手するに際し、私達は、エルサルバドルの民衆がどんなふうに闘っているかを知り、私達に何ができるかを考えねばなりません。そして、彼らの勝利のために、出来る限りの支援をせねばなりません。

昨秋以来、全国で4000、京都でも500を越える観客を得、多くのの方々から高い評価を受けている映画「ヤーの敵」は、ボリビアの「トルーゴ」が作製したものであるが、基本的な状況はエルサルバドルと同じです。400年の隷属を打ち切るために立ち上る原住民(インディア)の姿と、アメリカに支援された政府軍の残虐な報復は、その際エルサルバドル内戦の本質を伝えるものです。多くの新入生が映画と、討論の輪に加われることを望みます。

- I. 映画「ヤーの敵」上映
- II. 問題提起「インシカ事件」とは何だったのか?
- III. 討論

主催 京大ラテン・アメリカ研究会